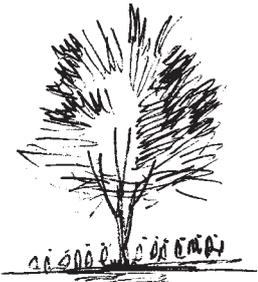


# 光の子



No.185 2018.6.5

●年間聖句 一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。  
(ヨハネによる福音書12章24節より)



「空を見あげて」

表紙絵・中島由起子

「桑の実に」

春遠からじ海峡も雪嶺も

をちこちの水煙めかせ初燕

礼所まで一本道や風薫る

八十八夜遍路の杖の床の間に

緑さす箱いづばいの納札

桑の実に汚す遍路の白衣かな

滴りて滴りて水守る神

黛 まどか

## 新年度を迎えて

施設長 竹花 信恵

若葉がまぶしい季節になりました。いつも光の子どもの家を応援していただき、ありがとうございます。間違いに気づくように、こころみにあわないうように、祈つてくださる皆様に感謝致します。

謝致します。

この春は18歳になって出発者がおらず、新たな年度を35名の子どもとともに迎えました。それぞれ一つずつ学年が上がり、幼稚園児6名、小学生10名、中学生9名、高校生以上10名となりました。

子どもたちは相変わらずエネルギッシュで、次から次にでてる問題に区切りをつけることさえままならない、まさに待ったなしの日々が始まっています。光の子どもの家は、創立以来三桁の子どもたちと出会ってきました。「私がこの子だったら、

こんなにまつすぐに生きることができない」と思う。そんな子どもへの気持ちは変わりませんとさせられ、幼児期、思春期、青年期、それぞれ大切な日々を過ごしていることを感じながら、毎日を暮らしています。

それでも近年、「これからどうしていこう」「どうしちゃったんだらう」と考え込む時が増えました。

昨年度も、私たちは「不適切な対応」を重ねてしまいました。「子どものために」という気持ちがあつても、感情が高ぶつたまま行動したり、何かが一歩ずれたりすれば、私たちが子どもを傷つける「加害者」になつてしまう。そのことを思い知らされました。

様々考えるなかで、「光の子どもの家らしさがなくなつてしまふ」「せっかく家庭的養育を志してきたのに」という意見もいただいています。

しかし、子どもとの距離も、ただ近ければ近いほどよいものではないこと。虐待という問題はまさに家族の中で、そして最も関係の深い中で起こっていることを改めて教えられました。

私たちは自分のことしか考え

られない人間です。うまくいかないとき、誰かのせいにしたくなつてしまふ。とくに、「子どもが難しくなつた」という言葉に逃げてしまふようになります。

これまでも、失敗してこなかったわけではありません。うまくいったことなど、どれほどあるでしょう。多くの失敗を経て今があります。しかし、人の生き方を変えてしまふ失敗は避けなければなりません。

「再発防止」のために、私たちは何をすべきだろうか。研修、新任教育、……。ひとまわりして、結局大人が子どもに丁寧に関わつていくしかない、そのために自らを省み、やり直していくしかない、と、原点に立ち戻ります。

家族的関係を目指し、子どもたちが生きていく大切な日々をお預かりしていきます。実家となつていくことを忘れず、これからのどのような暮らしをつかっていったらいいのだろうかと考え続けていきます。

光の子どもの家として職員都合より主体である子どもを優先させていくという理念を継承し、何ができないかというところで子どもに関わるのではな

く、子どもの存在そのものを受け止めていくように努めることを、再び事業計画に明記致しました。

安心した暮らしをつくり、子どもの隣に居続けること。ただ「居ればいい」ということでなく「居るのにいない」関係に気づくこと。足りないところだからであることを見つけてくる子どもの表現を見過ぎさないこと。光の子どもの家の総力をあげて「誰がどのように対応していくか」を考え続けていきます。昨年の春に出発したふたりは、おかげさまで無事2年目をむかえました。

毎日のように顔をみせる卒園生がいます。仕事をしっかりと続けることを目標にがんばっています。先日は「若いママ」になつた卒園生が顔を見せてくれました。彼女の腕に抱かれた幼子の顔に、かつての彼女の面影がありました。

なかなか思つたようにはならない中で、ここが少なくとも「帰ってくる場」「顔を出す場」として確かに存在していることを感じます。どんなことがあつてもここにいますよ、そんな家であり続けたいと思います。

## 看取り考(2) 看取りに対する医師の立ち位置

老健施設みゆきの丘施設長 仙道 富太郎

前号からの続きの話である。入所者が回復不可能な摂食障害に陥った場合、家族に状況を説明することになるが、説明の最も大事な部分は、それ以後の介護に関する選択肢を家族に提示

することである。第一選択肢としては、特別な治療をしないで、入所者の残っている生命力に頼ることであり、これが「看取り」に当たる。第二の選択肢としては、人口的に管を通して栄養を補給することになる（経管栄養）。胃に穴を空けて直接胃に栄養物を注入する場合（胃瘻）と、

胃まで到達する管を鼻腔から入れて、鼻腔から栄養物を注入する場合（経鼻経管栄養）がある。もちろん、最終的には、家族が相談して決めることなのだが、対象となる入所者が高齢であり

（おおよその自分の気持ちの目安として九十歳以上を念頭に置いていた）、特定の病気に罹患しているわけではなく、いわば生命の最終段階の自然の摂理としての摂食障害に陥ったのだと判断した場合は、私はまず看取りの方向を勧めることにしている。私は、大体次のような語り口で始める。「いまーさんの命のろーそくの火は消えかかっている状態だと思います。ろーそくの火を吹いて、燃え盛らせようとしたりしないで、ろーそくが自然に消えていくのをみんんで見守っていきませんか？」。

最近、治療方針などについて複数の選択肢がある場合、医師がいずれかの選択肢を勧めることはほとんどなく、患者、あるいは患者の家族に選択してもらおうと言われている。医療訴訟の問題などもあり、米国の医師の問題処理方法をなぞるようになったのだと思うが、市井の人々から、「患者としては困ることが多い」という話を何回も聞かされてきた。医学知識の貯えのない人が、種々可能性を挙げて選択を迫られても如何ともしがたいことが多いというわけである。私は臨床医の経験が無いので、大きな口を叩いてはいけないの

だが、患者の立場に立つて考えれば、「個人の考えですが」と断って医師本人の考えを説明することは、むしろ望まれることではないかと思うが、如何か。

ただ、臨床医が治療方針に関する私見を説明するのは、私が高齢者に看取りを勧めるのは、かなり性質の違う行為であることに留意しなければならぬ。私の行為は明らかに終末期医療に関する私の意思表明であり、人間の生命に関する倫理感を含んでいるのである。しかし、そうだからこそ、看取り対応が適切な医療・介護であると考えた場合には、医師は家族に自分の考え方を説明すべきではないかと私は思う。そもそも患者と医師の関係性は全人的なものであったはずである。患者は医師に自分の命を託し、医師はそれに対し全人的に対応することが基本であったが、社会の変遷に伴って患者と医師の関係も変化してきたのだと思う。看取りが、人間の生死に関する判断を含む医療行為であつてみれば、ここは、患者・医師関係性の基本に立ち返つて、倫理をも含む全人格で医師はこれに当たつていくべきではなからうかと思うのである。

正確な数は覚えていないが、私は少なくとも三十例以上の摂食不良に陥った高齢者の家族に看取りを勧めてきたが、全例において看取りによつて生命を全うされている。しかし、いま振り返ってみると、「本当にこれで良かったのかなあ」という疑念も残っている。というのは、看取りで命を全うされた九十歳を超えたご本人が、摂食不良になつた時に、胃瘻造設を本当に望んでいなかったのか、確証は得られていないのである。現在の医療は患者本人の意思を尊重することが基本であるが、前回の話にも書いたように、みゆきの丘では、入所時に、入所者本人の生命維持医療に関する意思を伺つてはこなかったもので、ここまで書いてきた話は、全部本人抜き家族との話である。失礼な話になるが、家族の中には、自分の利に寄りすがつて、判断をする人がいないとは限らない。そのようなことは限らない。に基づいた看取りの勧めに危うさが残っていることを認めたい。えで、現状ではなかなか難しい課題ではあるが、真に当事者本人に利することを確認できるような看取りの方向性を模索していきたい。

「共育ちカンガル―日記」

(48) 校長室の窓

近藤みちる

私が子どもだったころ、校長室は学校の中で最も縁の薄い場所だった。校長先生と言葉を交わした記憶もない。いつもスーツ姿のお客さんが出入りし、学園ドラマでは問題を起こした生徒が親に連れられて頭を下げる行くところ。校長室とはそういう所なのだと、ずっと思い込んできた。

そんな私が思わぬ形で校長室デビューを果たしたのは、優希が小学校に入って間もなくのこと。当時、優希は学校に馴染めず、深刻な登校渋りに陥っていた。学校の中に居場所が作れず、教室はおろか昇降口にも近づかなくなっていた優希に、校長先生自ら校長室登校を提案してくれたのである。

優希と共に生まれて初めて足を踏み入れた校長室は、どっしりとした大きな机と、革張りの立派な応接セットという、イメージ通りの設えだった。だが意外なことに、書棚には、校長室には不似合いなパズルやトランプなどの遊び道具が並んでいた。校長先生は、大学で特別支援教育を専攻し、教員生

活の多くを特別支援学級の担任として過ごしてきたこと。そして、優希のように学校に居場所を作れない子ども達のために、校長室をフル活用したいのだと、熱心に語ってくれたのだ。

大きな窓から流れ込む初夏の風は、校庭で響くホイッスルや、音楽室から漏れる少し不揃いなりコーダーの合奏の音、給食室から漂う懐かしい給食の匂いなどを、代わる代わる私達のもとへ届けてくれた。どうということのない学校の日常がそこには流れていて、私達は校長室の窓を通して、その穏やかな温もりを肌で感じたのだ。

校長室が居場所となったことで優希の心は少しずつほぐれ、1学期を終える頃には登校渋りも取まった。優希が校長室登校を必要としなくなった後も、私は校長先生と話がしたくて、しばしば校長室を訪れた。いつ扉をノックしても、校長先生は温かい笑顔で私を歓迎してくれた。

「本当は私、優希をS校に入れたかったんです。」

ある時私は、就学相談の頃から繰り返し打明けた。S校は私立の小中一貫校で、支援や配慮を必要とする子ども達の受け入れに定評があった。

「でもパパが反対して。守られた環境の中で育つことが優希のためになるとは思えない。地域の中で地域の子とも達と一緒に育つのが一番だ。でも今の優希を見ていると、やっぱりS校にしたい。後悔しているんです。」

「お母さん。優希ちゃんがこの学校に通う意味って、何だと思えますか？」

校長先生の問いかけに、私は沈黙した。その答えを私が未だ見出せずに苦しんでいることを、校長先生はよくわかっていただろう。私は、じつと校長先生の言葉に耳を傾けた。

「優希ちゃんね、この学校で『地域の中で生きていく素地』を作っているんですよ。――もしも今、他所から特別支援教育のプロフェッショナルを引き抜いて来て、優希ちゃんの専属に付けたとします。あるいはそういう学校に優希ちゃんを転校させたとする。きつと、今日の前にある問題は、一瞬で解決するでしょう。でも、僕にはそれが本当の意味で優希ちゃん

のためになるとは、どうしても思えないんです。――置かれた場所で、今ここにいる人達みんな、知恵と力を出し合って頑張る、解決していく。優希ちゃんと一緒に、みんな成長する。それが優希ちゃんの味方や居場所を増やして行くことに繋がる。それはそのまま地域で生きるための素地になる。地域で生きるってそういうことです。」

「地域で生きる」という校長先生の言葉は、その後の私達の最大のテーマとなった。置かれた場所でそこにいる人達と多くの苦楽を共にし、やがて学校の中だけでなく外にまでも、たくさんの方や居場所が出来たのである。

言い出しつぺの校長先生は、この春定年を迎えられ、皆に惜しまれつつ退職された。だが、私達の心の中には校長室の窓から見たあの風景や、そこで過ごした宝物のような日々が息づいている。それらは今もなお、私達を温かく励まし、時に力強くこの背中を押し出してくれるのである。

増えてをり校長室のかぶと虫  
みちる

## ショッパイ最中

先日、久しぶりにMさんがやって来た。

Mさんは、大変真面目で、熱心に事に当たる人である。

勤めの傍ら絵を描いている。これは、十五、六年位前だったろう

か、全く描いて

いなかったMさ

んが、絵を教え

てくれと、来た

のであった。聞

いてみると、絵

の具もキャンバ

スも持っていない

ということ、こ

ちらで揃えて

やり、全くの初

歩から油絵を描

き始めたのであ

った。熱心な人

だから、応募作

品中の金賞を取

り、もう、会員

として力作を出

品し続けている。

こんなMさんだから、私も、特

に親しみを持っている。このMさ

んが、時々やって来てくれるので

ある。

この度、久し振りだったので、ドーズドーズと迎え入れ、コーヒ

## ショッパイ最中／プレゼント

中島 睦雄

ーを飲んでもらった。

何か食べる物は、と思ったが、つい先日、人からいただいたものがあつた。紙の箱に入ったデパー

トの包装紙に包まれたもので、中には九個人つた物であつた。まわり

にカリカリとする皮に包まれた最中のようであつた。

「Mさん、人からいただいた最

中ですけど、食べてください」と

差し出した。

「そうですか、すみませんね」と

Mさんは一つ取って口に入れた。

「あれ！これはショッパイです

ね」と言う。

「え？そんな」と、私も口に入れ

てみた。カリツと、皮ごと噛んで

みると、やはりショッパイ。「え

ー？」と思つて良く見てみると、

最中どころか、お吸い物であつた。

ショッパイ最中なんて、日本中

どこを探したって有る訳がない。

「Mさん、これは最中じゃありませんよ。お吸い物だったんですよ。」

それでもMさんは、この、世にも不思議なショッパイ最中を食べ

てしまった。私は半分食べてやめた

のだつたが、二人思わず大笑い

であつた。ショッパイ最中、こんな

ものを食べた人は、恐らくMさん

と私だけだろうと思う。大笑い。

そして呆れてしまった。

## プレゼント

知り合いのAさんから電話があつた。

「今、アトリエの前に来ているんですよ。」

と言う。「あ、お茶でも飲んでい

つてよ。」と言つてアトリエに行

つてみると、入口の所に何やら箱

や包みなどが積んである。「まだ

車の中にあるんですよ。」と言つ

て車にもどつたAさんは、又、何

やらわからない品物を抱えてきた。

「何だい？これは」と聞くと、Aさ

ん曰く、「引越しをするので、家

の中を片付けていると、いろいろ

出てきてね。まだ使える物もある

んですよ。使つてみてください。

バザーか何かがあつたら、出して

もらつても良いんですが」と言う。

Aさんが帰つてから、それらの

品物を少し調べてみると、確かに

使えそうな物もあるにはあつた。

しかし、殆ど大部分は使い物にな

らないガラクタである。例えば、

新しい鍋があるかと思うと、使い

古した何かがへばり付いた大きな

フライパンのような物、或いは器

はなくて蓋だけ。大小の皿のセツ

ト等々、私にとつても、全く不要

なものばかりであつた。

様な物が溢れているんだから、特別な違和感はなかるう」とでも思

つたに違いない。

そうは言つても、私へのこのプレゼントは、自分では使えない、

始末に困るものである。

そんなことで、せっかく持つて

来てくれたプレゼントを、アトリエ

の前に積んだままにしておいた。

二日後後に、知り合いのS君が

来た。「これは何ですか？」と言

う。「知り合いの人が持つて来て

くれたんだけど、殆ど使えない物

ばかり、ジャマツケで困つている

んですよ」と言うと、「じゃあ、

全部もらつて行きますよ。そして、

使えない物は処理場へ持つて行つ

ちやいますよ」と言つて、全部持

つて行つてくれた。

これで、こちらは気持ちがあつ

ぱりした。やれやれ、それにして

もありがたい。

その後、三日ばかりしたら、A

さんが又やつて来た。「女物の下

駄が二足あるんで、持つて来たか

ら」と、又、プレゼントの追加で

ある。箱を開けてみると、なかなか

きれいな女物の下駄である。勿

論、うちでは使わないから、誰か

来たなら、押し付けちゃえ！と思つ

プリズム

激動の先にある光 仙道家

新年度を迎え、小学5年生になった翔平。振り返れば4年生の夏休み直前に光の子どもの家へとやって来たその日、不安と不満を最大限のエネルギーを使って表現するというスタートでした。

「こんなところに来たくなかった。」そう言つて飛び出し、安全を守るために後ろをついて歩く職員から逃れるように夕暮れ時の田んぼ道を行くあてもなく歩き続け、疲れと空腹からようやく光の子どもの家に戻ってきたのが21時過ぎでした。使い果たしたエネルギ―を、用意された温かい夕食で補うと不安は徐々に和らぐもの、まだ残る不満と諦めの中で最初の一日が終わりました。

その後はすぐに夏休みに入り、家のメンバーにも次第に慣れ山登りや海水浴など楽しい行事が続く中で、光の子どもの家を自身の居場所として少しずつ受け入れていく日々を重ねていきました。

そして2学期、家での生活にはすっかり馴染んでおりましたが新しい学校生活はなかなか受け入れ

られませんでした。学校まで車で送つても校舎に入らず、校舎の中央まで手を引いて連れて行つても教室に入らず、職員室に登校してすぐに帰ってきてしまう。そんな日々をしばらく続けていました。

『こんな毎日もいつか必ず笑い話になる』そう信じ続けて数週間、2学期も半ばに差し掛かるころには長い通学路を自ら歩いて登校できるようになりました。その後も課題を一つ一つ乗り越えて行き、5年生になったこの4月翔平は登校の班長となり1年生の手を引いて元気に登校しています。

突然変わる生活拠点、共に暮らすメンバー、さらには学校生活。そんな経験をするのは施設で暮らしている子どもたち以外にそう多くはないはず。順応するまで時間がかかるのは当然の事、それを『戸惑い』や『反発』という形で素直に表現できることは至って普通の成長過程であるということ。を念頭に置き、今後も翔平のペースを見守っていきたいと思います。

(小西 剛史)

拍手 佐藤家

新年度が始まり、12月に来たばかりの慎太郎は、幼稚園年少組に通り始めました。でもまだおむつがとれていません。

入園前、パンツで過ごしていて、そろそろトイレかな?と思い、トイレへ慎太郎を連れて行きます。座らせて、

「おしっこ、シー。出るかな?」  
と、待ちます。  
「……。でない」  
と、慎太郎。

「また今度がんばろうね」  
と、パンツとズボンをはかせます。  
また遊び始める慎太郎。すると、  
「おしっこでた」

と、歩きにくそうにやってくる慎太郎。タイムングが合わないのは、「トイレットトレーニングあるある」でしょうか。

そんな状態なので幼稚園入園は不安です。入園後、着替えを慎太郎にもたせました。先生が洗ってくれたパンツなどを毎日もち帰ります。「先生方、毎日ご面倒おかけします」と心の中で思いながら

慎太郎から受け取ります。そのよ

うな毎日を2週間ほど続けたある朝、同じ家の田口がいつものように慎太郎をトイレにつれて行きました。すると、

「慎太郎、おしっこしてますよ!」  
と弾んだ田口の声。私もトイレへ行き、  
「慎太郎すごい」  
と、パチパチ拍手をしました。

それからは、たまに失敗することもあります。トイレでできることの方が増えました。  
カッコいいね、慎太郎。  
(池田 祐子)

「人とのつながり」 原田家  
光の子どもの家も新体制で新年度スタートです。今年度もどうぞよろしく願っています。

子どもたちも期待と不安を胸に、それぞれ元気に幼稚園、小学校、中学校、高校へと入学しました。みんな1つずつ学年が上がり、気持ちもあらたに一生懸命がんばっています。

わたしの担当の子たちは、この季節、弱い子どもたちです……。

ある子は、同じ先生に2年間続けて担任してもらい、とても慕っていました。ところが、その先生が他の学校に異動してしまい、とても残念がっていました。一緒に卒業したかった思いが、かなわずに……。

でも「今度の離任式で先生に家の番号わたくし！ 手紙書く！」と言っている姿に、人とのつながりをきちんともてる子だな、とあらためて思いました。

「人とのつながり」を大切にっ  
なげていってほしいと思います。  
(岩瀬 志穂)

留守の日の食卓 倉澤家

今年度の倉澤家は、中学生になった拓海が本園に移動し、4月から高校生になった瑠璃が加わって、中高生女子4名でのスタートとなりました。また、これまで一緒に倉澤家を担当していた女性職員が昨年度末をもって退職し、倉澤が一人で担当することになりました。

とは言っても、自分のことは自分でできる中高生女子メンバーなので、日常的には一人でも何の問題もありません。子どもたちにもこれからはこれまで以上に自分のことは自分でやってほしいこと、倉澤の留守をきちんと守ってほし

いということを伝えました。ただひとつ心配だったのが、倉澤不在時の食事でした。

新しい体制開始早々、倉澤が2泊3日で家を留守にしなければいけなくなりました。高校3年生の二人を、掃除主任、調理主任に任命し、がんばってほしい旨を伝え、男子職員や他職員にはサポートをお願いして出かけました。

それでも気になり、今日のお昼は何食べた？ 夜ごはんは何作るの？とメールを送りました。すると、ラーメン、やきそば、とりのなんこつの唐あげ、豚汁、大根サラダなどの写メが届きました。

ほとんどお金を使わず、冷蔵庫の中にあつた物で献立を考え、調理したようでした。どれもとてもおいしそうで100点満点中98点の出来！ マイナス2点はおかず作りを集中してしまい、ごはんを炊くのを忘れてしまったことです。

これまでは、必ず誰かがいることで子どもたちのやる気や力を発揮させる場をとりあげてしまっていたなど反省させられるべきことでした。

今年度の倉澤家の目標は、自分たちの生活は自分たちで！ 留守を守る四姉妹！です。これから四人の成長をお楽しみに！  
(倉澤 智子)

銀輪は唄う？ 牧野家

最近、伊織が張り切っています。伊織は、学校から来るバスの集合場所まで、職員の車で送迎されています。昨年度は(ほぼ)毎朝が時間との戦いでした……。

今年度は違います。「お迎える車が来る5分前に準備を済ませるのを、2ヶ月続いたら自主通学していいってママ(＝牧野)と約束したんだ。」「わたし電車とバスで学校に行くの。」

卒園を見据えて自立心が伸びてきたのでしょうか。ぜひ頑張ってもらいたいものです。私たちも応援していきな……「だから駅まで車で送ってね。」って、え？

中学生になる子には、「進学・進級祝いの会」で通学用の自転車プレゼントするのが慣わしとなっています。しかし、どこの家もメンバーの入れ替えや部屋替えて大忙し。気がつけばもう会の当日になっていました。

夕方、2台の自転車が軽トラに積まれてきました。仙道家の男子2人のものです。

買ったきた小西指導員曰く「通学用の自転車、だいぶ数が減っている。売り切れそうだよ。」

それは困る。残る3人の自転車

を用意するため、すぐに各家の中学生と職員とでホームセンターの自転車売り場に向かいました。

幸い、千曉の自転車はいくつかの車種、色の中から選ぶことができました。

それまで千曉が使っていた自転車は、こんど3年生になる美樹に譲ることになりました。これで「本園まで自転車で行きたい！」「ローラーすべり台の公園(羽生スカイスポーツ公園)まで走りたい！」というときも、みんなと一緒に走れます。

自転車に乗ることができると、行動範囲が広がり、運べる荷物も多くなります。伊織にとっては、卒園後の自立にも大きく関わっていくことでしょう。

実際に自主通学ができるようになるかはわかりませんが、駅までも、通学バスの集合場所までも、自転車で行けるようにしていきたいと思っています。

(佐藤 義岳)



それから

理事長 菅原 哲男

夏目漱石「それから」の代助は、父親の援助で一軒家を構え、書生を置き、世間とは距離を置いた悠々自適の暮らしを生きていた。

それに肖るには随分と違う児童養護施設を利用する子どもたちの事情である。

私たちは児童養護施設などにいる子どもを「施設の子」ということがある。この言葉のイメージは決して晴れがましいものではないだろう。

児童養護施設が産み出した子どもはいない。あり得ないのである。このところやってくる子どもは、少な過ぎる例外を除いて虐待による入所である。

私は子どもたちの不幸を飯の種として半世紀を超えようとしている。そのうちで最も極端と思われる不幸な子どもがいかなる状況にあったか、具体的に考えてみる。

今から30数年前のことである。私にとってあの神奈川の施設は、初めて児童養護施設を経験

した聖地であった。その長から、守さんが亡くなった。できれば葬りの式に出てほしい、と電話があった。

守は、私とその施設を辞した頃は小学校低学年だった。あまり目立たない子で、学力は高くない、今だったら特別支援教育の対象になると思われる子だった。中学を卒業した後は埼玉県北部の農家に住み込み手伝いをしていったという。

その施設の大人たちは農業という仕事を軽く見過ぎていたように思う。暮らしても施設でしていた暮らしとは全く違うものである。面食らっていたら15歳前後の子どもには丁寧な関わりが必要だっただろう。

彼は、農家で使う農薬をあおって自死したのだった。施設のある町に帰りたいと願っていた彼の亡骸を、施設長は知り合いの教会に頼み込んで北埼玉の教会で簡単な葬式をして、お骨のご帰還となつたのであった。

その施設長が亡くなって後継

となつた施設長から丁寧なご連絡があり、晃が亡くなったと聞いた。結婚をして子どもも複数もうけたが餓死をしたという。

この晃が中学3年生の時に私は埼玉に移つたのだった。彼は私がどうしてその施設からいなくなつたのか不審に思い続けたようだった。

光の子どもの家は、創立時から11月3日に支援者などをお招きし、感謝の集いを行っている。その神奈川の施設でも、同じ日にオープンキャンパスのようなことを催すようになっていた。

晃の強い要望で、ある年の催しが4日に変更された。おかげで、私は懐かしい顔たちが行き交う行事に初めて参加することができたのだった。それから数年後の餓死事件であった。

そこを去ってから10年程推移していたので、晃の暮らしや思いなど知るよしもなかったが、行事の日程を変えるほど晃は働きかけたのだらうと思うのである。

性同一性障害の男子が、中卒で社会に出て暮らし、30代前半にフィリピンで銃で撃たれて死んだ。

その子にとって、人生の半分

を過ごした施設とは、何であつたのだろうか。幼少期は女の子のような遊びをしている軟弱者と叱りつけられ、親しく話を聞いてもらふ機会に乏しかっただろうと思うのである。

昨今は貧しいながらもLGBTの社会的認知が進みだしてはいるが、当時は精神科の治療を勧められる病と認識されていたのだから。

2番目の施設では、30代前半の大王になつた男が、初めて棟梁になり建てかけていた家の梁に紐をかけて自死した。また癩癩を持病にしていた、これも30代前半の男が仕事場で発作を起こして死んだ。

生まれたことを肯定し、喜び合えるようになりたいと願って立ち上げた児童養護施設だが、私の飯の種にしてきた子どもたちの現実は、生まれたことを受け止めるにはいささか過酷に過ぎていたようである。

子どもたちの痛みを我が物とし、ともに担うことで生まれて出会えたことを喜び合うという児童養護施設の理念をもう一度確認して、これからの関わりに資したい。

現場から

年度の変わり目に

遠藤 恵里香

春光うらかな季節を迎え、光の子どもの家の子どもたちもそれぞれ、進学・進級・転学・就職と新生活をスタートさせています。

私の担当する楓は中学1年生となりました。入学式でぶかぶかの制服を身にまとい、体育館へ入場する姿を見て、時の流れの早さを感じながら、ふと、楓とのこれまでの日々が思い出されました。

楓と私が初めて出会ったのは5年前の夏。私はその時実習生で、楓は小学2年生でした。120のタンクトップを着てカリフォルニアから来たインターン生に肩車をしてもらっていたのが印象的でした。実習を終えてなんやかんやでそのまま光の子どもの家で就職するこ

とになり、楓の担当となることが決まりました。私が着任して2週間ほどは、元担当の保育士さんが出たため、楓は担当さんとの別れを惜しむように甘えの限りを尽くしていました。担当が私に代わってから、楓は私の至らなさに何度失望したかわかりません。それだけでなく、自分の置かれた環境に対して、幼いながらにやりきれない思いをたくさん抱えていたこと

と思います。楓は優しく誠実に成長してきました。楓の誠実さは、元担当の保育士さんや職員、友人など、これまで関わってくださった方々の支えがあったからこそ培われてきたものだと思います。これから進路選択などたくさん迷

うことがあるかと思いますが、支えてくださる方々とともに、楓の成長を見守っていききたいと思えます。

昨年度の3月まで私が担当していた瑠璃は、長く苦しい受験生活を終え、無事、公立高校入学を果たしました。私が受験生を担当したのは瑠璃が初めてで、私自身が受験に関してわかっていない部分が多く、あまり力になれなかつたと反省しています。瑠璃は勉強熱心で中学2年の終わりから学習塾へ通い始めました。本来は週3回の塾でしたが、それ以外の日も自習室が利用できるのとことで、結局週6回、ほぼ毎日塾に通い詰めていました。しかも、平日はいつも利用時間ギリギリの23時まで勉強してくると言って聞きません。塾までの送迎は職員で行っていたのですが、23時まで私が起きていられず、迎えをすっばかしてしまつたことが数回ありました。:(

(代わりに送っていただいた方々に心から感謝します。:) 夜遅くまで勉強してくる瑠璃の努力は簡単に真似できるようなものではなく、心から尊敬していました。その反面、疲れがたまつてはいないかと心配にもなりました。

瑠璃は学校生活においても、部

長、生徒会役員、学級委員と大変な役割をいくつも担っていたため、学校での活動と受験勉強を両立させることはかなりエネルギーのいることだったと思います。しかし、持ち前の頑固で負けず嫌いな性格からか、辛そうな素振りは見せず、どれも手を抜かずに取り組んでいました。そんな瑠璃を1年間間近で見えたため、受験の当日は私のほうが緊張したのではないかと感じました。受験を終えたその日に瑠璃は自己採点を行い、自身が目標としていた点数に届いていなかったようで、大変落ち込んでいました。これまで見たことのない悔しそうな表情の瑠璃を見て、私も心が痛みました。:(あれだけ努力していたのだから、報われていてほしい。:)と願って、合格発表の日を迎えました。結果は見事合格。この1年間の努力が実り本当に良かったと思えました。

瑠璃は高校入学を機に本園を離れ、自立生活を目指す分園で新生活をスタートさせています。担当を離れた今でも、瑠璃の高校生活そして、高校卒業後の進路についても力になっていければと思っています。



6月2日に「光の子どもの家小さくても大バザー」を行いました。バザー物品のご提供、ボランティアによるご協力、ご来場くださった方々に大変感謝致します。ありがとうございました。

光の子どもの家バザー実行委員会

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2018年1月～2月

2018年2月現在

幼児7名 小学生14名 中学生6名 高校生8名 計35名

1月

1日 元旦礼拝 卒園生も加わり礼拝後賑やかに食事会。一人一人新年の挨拶、抱負も発表

2日～3日にかけて各家それぞれで初詣、コタツでのんびり、初売り外食、卒園生の会などでお正月らしく過ごす

5日 正月気分をぶっとばそう会 お正月の気分を取り払うために皆で食事会。将来の夢を発表

13日 卒園生の安田さん三浦さんの祈念礼拝。墓参後、卒園生、友人も来訪し会食

15日 1月生まれの誕生会

19日 東大宮教会の久保島泰牧師による夕礼拝 感謝

20日 光の子どもの家後援会によるうどん会 感謝

21日 東大宮教会、教会学校教師との懇談会

22日 社会福祉援助技術ステップアップ研修に遠藤が出席

26日 東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝

29日 大利根中学校との懇談会

30日 大利根東小学校との連絡会

2月

1日 グループホーム牧野家耐震工事着工

2日 聖徳大学より実習生

9日 東大宮教会の久保島泰牧師による夕礼拝 感謝

11日 加須消防署の救命救急講習に穴水が出席

13日 中堅職員研修に新吉屋が出席

14日 原道小学校との連絡会

16日 守谷教会の若月健吾牧師による職員礼拝 感謝  
子どもの園より保育士が来訪見学

17日 肉会開催

19日 二月生まれの誕生会

23日 東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝

24日 イチゴ会&温泉会開催

25日 性教育のための研修へ岩崎が出席

<寄贈者各位>

東埼玉バプテスト教会 櫻井秀夫 境キリスト教会

第一生命労働組合熊谷支部 大手川 古河農友会

金久保公男 バカボンズファミリー 代表田中直喜 他12名

㈱カーブス 福田稔 他多数の皆様

<ボランティア各位>

山田智 山田裕子 向井進 加藤瑠海 常松洋介

岡本有代 まりずむん 他多数の皆様

☆2018年度、新たにスタートする子どもたちの応援よろしくをお願いします(黒川)

//////— [反] [射] [光] —//////

映画「隣る人」が4年ぶりに劇場で上映されます。6月2日(15日、東京・ポレポレ東中野にて) 6年前に東中野で映画を見ていた学生が、今号より本欄を担当します。1年前、就職時の面接では「女性はたくさん映画に映っています。1年前、就職時の面接では「女性は何を映っていますか」と尋ねました。今も人にも聞かれると答えに詰まります。▼子どもに「そんなこと言うのは自分が人に責められるからでしょ」と反発されたとき、そうではない、と淡々と説明できなかったのはどうしてだろう。言わなかったなら自分自身が責めていただろう。辛い日々をいつか笑い話にできるように、目の前のことを一つずつ。▼私たちも「ショットパイ最中」をいただきました。加賀麩不室屋の品です。会議後の食堂に置かれていたのを食べそうになった職員がこのまま置いておいたなら小さな食いしん坊たちも、きつと……。▼菅原から渡された原稿に「養護メモ135」と。183号は151回だったのに？とバックナンバーを読み返してみると、175号に167回、176号に177回が載っている！それならばと1号からの総目次を作り始めました。果たして連載はいま何回目なのか。真相は次号で明らかに。

(義)